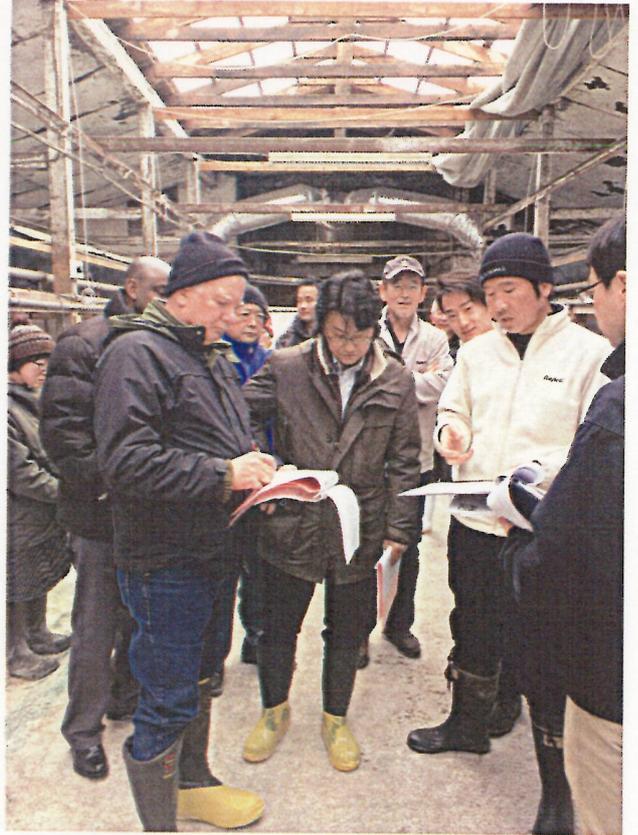


## 『Dr.ジェームス K. ドラックレイ氏来訪』

去る2月11日、イリノイ大学畜産学部教授のドラックレイ先生が全酪の方々と共にトータルハードカーフサービスを視察に来訪されました。好天に恵まれつつも、非常に寒い日でしたが、2時間ほど滞在されました。従来からあるカーフサービスのハッチや新設されたロボット哺育舎を見学しながら、佐竹先生がカーフサービスでの飼養環境、疾病状況などについて説明し、様々な意見交換をしました。

ドラックレイ先生は2月に全国数ヶ所で開催される全酪連・酪農セミナーでの講演のために来日し、2月13日、14日に帯広で開催されたセミナーに合わせて、北海道を回られたようです。

弊社から黒崎会長と私が帯広でのセミナーに参加しましたので、今後、その情報もお伝えしたいと思います。



## 『全酪連・酪農セミナー』

2月13日、14日の二日間、帯広で開催されたセミナーに参加させていただきました。その中の1つのトピックスについて簡単に触れて見たいと思います。

### <妊娠中の母牛の栄養状態（特に乾乳期）が胎児に及ぼす影響>

結論から先に言うと、「通常の合理的な乾乳の飼養管理をしている場合、影響はごく小さいものだろう」とのことでした。特殊な飼養環境や疾病がなければ、胎児に対する影響は少ないようです。

この問題を考えていく上で、まず「胎児プログラミング」という聞きなれない言葉について説明します。「胎児プログラミング」とは遺伝子の変異・変化を伴わず、胎児期の刺激等によって遺伝子の発現量に生じる差異のことです。言い換えると、胎児の遺伝子は変わらないが、その遺伝子がどれだけ機能するか？というスイッチのON/OFFが、母牛の状態によって変化するのではないか、ということです。

この問題に対して、二つの研究結果を紹介します。

①クローズアップで栄養を制限した場合、その産仔のブドウ糖代謝に負の影響があった→乾乳期間で極端に栄養が不足すると、胎児に影響するのではないか。

②泌乳中の妊娠（つまり経産牛）と非泌乳中の妊娠（未経産）で、それぞれ生まれた仔のその後の乳量や搾乳日数を比較すると、わずかに泌乳中の妊娠（経産牛）で生まれた仔の方が低かった→高泌乳牛から生まれた仔は、その仔の持つ“本当の”潜在的遺伝能力を発揮できないかもしれない。

この他にも様々な研究結果があるものの、現状のデータからは、「乾乳牛の栄養が極端な状況でなければ、子牛の生時体重、生存率にはほとんど影響しないだろう」ということでした。

こういった研究はまだまだこれから行われていく分野ですが、“Today's calf is tomorrow's cow.”と言われているように、良い子牛を得るためには乾乳期の管理も重要だということを再認識する良い機会になりました。